

[A年] 受難節第2主日(2025年3月16日)**【旧約聖書日課】 イザヤ書 35章1～10節**

- 1 荒れ野よ、荒れ地よ、喜び躍れ
砂漠よ、喜び、花を咲かせよ
野ばらの花を一面に咲かせよ。
- 2 花を咲かせ
大いに喜んで、声をあげよ。
砂漠はレバノンの栄光を与えられ
カルメルとシャロンの輝きに飾られる。
人々は主の栄光と我らの神の輝きを見る。
- 3 弱った手に力を込め
よろめく膝を強くせよ。
- 4 心おののく人々に言え。
「雄々しくあれ、恐れるな。
見よ、あなたたちの神を。
敵を打ち、悪に報いる神が来られる。
神は来て、あなたたちを救われる。」
- 5 そのとき、見えない人の目が開き
聞こえない人の耳が開く。
- 6 そのとき
歩けなかった人が鹿のように躍り上がる。
口の利けなかった人が喜び歌う。
荒れ野に水が湧きいで
荒れ地に川が流れる。
- 7 熱した砂地は湖となり
乾いた地は水の湧くところとなる。
山犬がうずくまるところは
葎やバビルスの茂るところとなる。
- 8 そこに大路が敷かれる。
その道は聖なる道と呼ばれ
汚れた者がその道を通ることはない。
主御自身がその民に先立って歩まれ
愚か者がそこに迷い入ることはない。
- 9 そこに、獅子はおらず
獣が上って来て襲いかかることもない。
解き放たれた人々がそこを進み
- 10 主に贖われた人々は帰って来る。
とこしえの喜びを先頭に立てて
喜び歌いつつシオンに帰り着く。
喜びと楽しみが彼らを迎え
嘆きと悲しみは逃げ去る。

【使徒書日課】 ヨハネの手紙一 3章1～10節

1 御父がどれほどわたしたちを愛してくださるか、考えなさい。それは、わたしたちが神の子と呼ばれるほどで、事実また、そのとおりです。世がわたしたちを知らないのは、御父を知らなかったからです。2 愛する者たち、わたしたちは、今既に神の子ですが、自分がどのようになるかは、まだ示されていません。しかし、御子が現れるとき、

御子に似た者となるということを知っています。なぜなら、そのとき御子をありのままに見るからです。3 御子にこの望みをかけている人は皆、御子が清いように、自分を清めます。4 罪を犯す者は皆、法にも背くのです。罪とは、法に背くことです。5 あなたがたも知っているように、御子は罪を除くために現れました。御子には罪がありません。6 御子の内にいつもいる人は皆、罪を犯しません。罪を犯す者は皆、御子を見たこともなく、知っていません。7 子たちよ、だれにも惑わされないようにしなさい。義を行う者は、御子と同じように、正しい人です。8 罪を犯す者は悪魔に属します。悪魔は初めから罪を犯しているからです。悪魔の働きを滅ぼすためにこそ、神の子が現れたのです。9 神から生まれた人は皆、罪を犯しません。神の種がこの人の内にいつもあるからです。この人は神から生まれたので、罪を犯すことができません。10 神の子たちと悪魔の子たちの区別は明らかです。正しい生活をしない者は皆、神に属していません。自分の兄弟を愛さない者も同様です。

【福音書日課】 マタイによる福音書 12章22～32節

22 そのとき、悪霊に取りつかれて目が見えず口の利けない人が、イエスのところに連れられて来て、イエスがいやされると、ものが言え、目が見えるようになった。23 群衆は皆驚いて、「この人はダビデの子ではないだろうか」と言った。24 しかし、ファリサイ派の人々はこれを聞き、「悪霊の頭ベルゼブルの力によらなければ、この者は悪霊を追い出せはしない」と言った。25 イエスは、彼らの考えを見抜いて言われた。「どんな国でも内輪で争えば、荒れ果ててしまい、どんな町でも家でも、内輪で争えば成り立って行かない。26 サタンがサタンを追い出せば、それは内輪もめだ。そんなふうでは、どうしてその国が成り立って行くだろうか。27 わたしがベルゼブルの力で悪霊を追い出すのなら、あなたたちの仲間は何の力で追い出すのか。だから、彼ら自身があなたたちを裁く者となる。28 しかし、わたしが神の霊で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ。29 また、まず強い人を縛り上げなければ、どうしてその家に押し入って、家財道具を奪い取ることができるだろうか。まず縛ってから、その家を略奪するものだ。30 わたしに味方しない者はわたしに敵対し、わたしと一緒に集めない者は散らしている。31 だから、言うておく。人が犯す罪や冒瀆は、どんなものでも赦されるが、“霊”に対する冒瀆は赦されない。32 人の子に言い逆らう者は赦される。しかし、聖霊に言い逆らう者は、この世でも後の世でも赦されることがない。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

イザヤ書35章1～10節

- 1 荒れ野と乾いた地は喜び
砂漠は歓喜の声を上げ
野ばらのように花開く。
- 2 花は咲き溢れ
大いに喜びの歌声を上げる。
レバノンの栄光と
カルメルとシャロンの輝きが砂漠に与えられる。
人々は主の栄光と私たちの神の輝きを見る。
- 3 弱った手を強くし
萎えた膝を確かにせよ。
- 4 心を騒がせている者たちに言いなさい。
「強くあれ、恐れるな。
見よ、あなたがたの神を。
報復が、神の報いが来る。
神は来られ、あなたがたを救う。」
- 5 その時、見えない人の目は開けられ
聞こえない人の耳が開かれる。
- 6 その時、歩けなかい人は鹿のように跳びはね
口の利けない人の舌は歓喜を上げる。
荒れ野に水が
砂漠にも流れが湧き出る。
- 7 熱した砂地は池となり
干上がった土地は水の湧く所となる。
ジャッカルが伏していた所は
葦やバビルスが茂る所となる。
- 8 そこには大路が敷かれ
その道は聖なる道と呼ばれる。
汚れた者がそこを通ることはない。
それは、その道を行く者たちのものであり
愚かな者が迷い込むことはない。
- 9 そこに獅子はおらず
飢えた獣は上って来ず
これを見かけることもない。
贖われた者たちがそこを歩む。
- 10 主に贖い出された者たちが帰って来る。
歓喜を上げながらシオンに入る。
その頭上にとこしえの喜びを戴きつつ。
喜びと楽しみが彼らに追いつき
悲しみと呻きは逃げ去る。

ヨハネの手紙一3章1～10節

1私たちが神の子どもと呼ばれるために、御父がどれほどの愛をお与えくださったか、考えてみなさい。事実、私たちは神の子どもなのです。世が私たちを知らないのは、神〔別訳→御父、御子〕を知らなかったからです。2愛する人たち、私たちは今すでに神の子どもですが、私たちがどのようになるかは、まだ現わされていません。しかし、そ

のことが現わされる〔別訳→御子が現れる〕とき、私たちが神〔別訳→御子〕に似たものとなることは知っています。神〔別訳→御子〕をありのままに見るからです。3神〔別訳→御子〕にこの望みを抱く人は皆、御子が清いように自分を清くするのです。4罪を犯す者は皆、不法を行っています。罪とは不法のことです。5あなたがたが知っているように、御子は罪を取り除くために現れました。御子には罪がありません。6御子の内にとどまる人は皆、罪を犯しません。罪を犯す者は皆、御子を見たこともなく、知ってもいないのです。7子たちよ、誰にも惑わされないようにしなさい。義を行う者は、御子が正しいように正しい人です。8罪を犯す者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。神の子が現れたのは、悪魔の働きを減ぼすためです。9神から生まれた人は皆、罪を犯しません。神の種がこの人の内にとどまっているからです。この人は神から生まれたので、罪を犯すことができません。10これによって、神の子どもと悪魔の子どもとの区別がはっきりします。義を行わない者は皆、神から出た者ではありません。きょうだいを愛さない者も同様です。

マタイによる福音書12章22～32節

22その時、悪霊に取りつかれて目が見えず口の利けない人が、連れられて来て、イエスが癒されると、ものが言え、目が見えるようになった。23群衆は皆驚いて、「まさか、この人がダビデの子ではあるまいか」と言った。24しかし、ファリサイ派の人々はこれを聞き、「悪霊の頭ベルゼブルの力によらなければ、この者は悪霊を追い出せはしない」と言った。25イエスは、彼らの思いを知って言われた。「どんな国でも内輪で争えば荒れ果て、どんな町でも家でも、内輪で争えば立ち行かない。26サタンがサタンを追い出せば、それは内輪もめだ。それでは、どうしてその国は立ち行けよう。27私がベルゼブルの力で悪霊を追い出しているのであれば、あなたがたの仲間〔直訳→子ら〕は何の力で追い出すのか。だから、彼ら自身があなたがたを裁く者となる。28しかし、私が神の霊で悪霊を追い出しているのなら、神の国はあなたがたのところに来たのだ。29また、まず強い人を縛り上げなければ、どうして家に入って家財道具を奪い取ることができるだろうか。まず縛ってから、その家を略奪するものだ。30私と共にいない者は私に反対する者であり、私と共に集めない者は散らす者である。31だから、言うておく。人が犯す罪や冒瀆は、どんなものでも赦される。しかし、霊に対する冒瀆は赦されない。32また、人の子に言い逆らう者は赦される。しかし、聖霊に言い逆らう者は、この世でも来たるべき世でも赦されることはない。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・3月16日「受難節第2主日」の日課主題は「悪と戦うキリスト」。

・旧約聖書日課は、「イザヤ書」から、「荒れ野の回復」を歌う預言箇所。使徒書日課は、「ヨハネの手紙一」から、御父の愛に基づいて兄弟をも愛することの必然を説く箇所。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、「ベルゼブル論争」の箇所。

旧約日課(イザヤ 35 章より)

・「イザヤ書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第一に置かれた預言文書。前8世紀の南王国ユダで四代の王(ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤ)に仕えた宮廷預言者「イザヤ」の預言句集と活動録の集成として編纂されているが、通説では40章以下を後代(前6世紀)の加筆として扱う(「第二イザヤ」などと呼ばれる)。1~39章には、本書冒頭の標題で示された四代の王の時代に即してイザヤの関わる出来事を物語る説話が各所に置かれており、本書自体がその時代背景に即して解釈されることを期待しているとみなせる。その中にたとえ後代の加筆挿入などがあるとしても、これを全体の文脈から切り離して再構成した連結で解釈することは適当ではない。

・日課箇所を含む32~35章は、「シオンの回復」が告げられる預言句のまとまりを為している。「シオン」は、元来はエルサレムの神殿が建てられた丘を指す語で、徐々に城都全体を指す語として用いられるようになったとされる。多くの場合に「エルサレム」とほぼ同義で用いられている(イザ33:20など参照)。「イザヤ書」では、両語とも全般にわたって用いられているが(「シオン」49例、「エルサレム」48例)、32~35章中では、「シオン」が5例に対して、「エルサレム」は1例のみ。「シオン」を多用して告げられる回復預言は、終末論的神学の傾向を表すものとして解釈されることもある。

・他方で、32~35章中では、「エドム」だけが具体的に国名を挙げられて裁きを告げられている(34章)。「エドム」は「ユダ」の南西に位置する隣国で、両国間では紛争が絶えなかったと考えられており、「列王記」はたとえば南王国ユダの王アマツヤ(在位=前800~783年頃)の時代に「エドム」を撃って支配下に置いたこと(王下14章)などに触れている。「イザヤ書」中では、「エドム」に触れる箇所が他に2箇所(11:14、63:1)あるのみ。

・これに対して、「シオンの回復」を告げる中で、「レバノン」、「シャロン」、「カルメル」など北王国北部以遠の地名が比喩的に挙げられて、その衰亡と回復が告げられている(33:9、35:2)。「レバノン」は、23章で破壊が告げられている「ティルス」や「シドン」を指すと考えられ、そこですでに70年後の回復の預言が告げられている。「カルメル」は、ユダ・イスラエルの山岳地帯が

地中海に至る山脈地域で、地中海沿いの南側は肥沃な平野が広がり、その平原が「シャロン」と呼ばれているとされる。「カルメル」を挟んで北東側には「イズレエル平野」と呼ばれる穀倉地帯があり、この平野を抜けて地中海に抜けると、「ティルス」や「シドン」に至る。すなわち、「レバノン、シャロン、カルメル」は、ユダ・イスラエルが経済的に依存していた地域を指しており、比喩的にだけでなく実際にも、これらの回復は「シオンの回復」の前提であったと考えられる。

・「イザヤ書」の設定する背景年代を考慮すると、これらの預言は、北王国イスラエルの滅亡(前722年頃)後、アッシリア国内の王位継承問題などの隙を衝いてエジプトが反アッシリア同盟を企てたことに対して、アッシリアの新王センナケリブが反アッシリア側に付いた諸国を破壊し、南王国もその意図を疑われて存亡の危機に追い込まれた時期(前700年頃)を背景に、その危機を乗り越えた先を見通して、あるいは乗り越えた先で、告げられているものとして解釈される。

・日課箇所は、40章以下との共通点を数多く指摘される。「イザヤ書」の編集者には、イザヤの時代に起こったような政治的激動が後代に繰り返されたときに、古い時代に告げられた預言を再び聞き直すことで、現に起こっていることに対する指針を得させようとする意図があったのではないかと推察される。

使徒書日課(ヨハネ3章より)

・「ヨハネの手紙一」は、新約聖書中で「共同書簡」という括りで扱われる書簡文書(「ヤコブの手紙」、「ペトロの手紙一、二」、「ユダの手紙」など)の一つに数えられる文書であるが、歴史的には、「ヨハネ福音書」および「手紙二」、「手紙三」と共に、他の新約文書とは異なる教会グループ(「ヨハネの教会」などと呼ばれる)が生み出した文書群(「ヨハネ文書」と称される)の中の一つとして扱われることが一般的である。「ヨハネの教会」は、エルサレムの初代教会を構成した「使徒たち」の一人である「使徒ヨハネ」が、使徒たちが次々にエルサレムを離れて各地で教会形成に取り組み始めた時期に、まずサマリア地方で(使徒8章の記述を参照)、その後はガリラヤ地方などを経て最終的にエフェソに拠点を移して活動した教会共同体として、教会伝承が伝えてきた教会グループ。「使徒ペトロ」のもとにまとまりつつあった主流派に対して一定の距離を置き、独自の路線を保っていたが、最終的には、主流派グループと協調する路線に修正し、古代の「公会教会主義」(古カトリシズム)に立つ教会ネットワークに組み込まれたと推察される。その過程で、教会内でも路線対立が起こり、混乱が生じたり、それに対応する諸文書の公開がなされたと推認される情報が、「ヨハネ文書」各書に見出される。「ヨハネの手紙一」は、初版「ヨハネ福音書」が公開された後、その解釈をめぐる誤解を解く目的で著され、この「手紙一」の指針に基づいて改訂版「ヨハネ福音書」が作成されたと考えられている。

・日課箇所では、御子によって御父を信じる者が、自分の兄弟、すなわち信者の仲間を愛さないことは罪に当たると警告を発している。本書箇所では、繰り返し、神の愛に立脚しながら、神を愛することと兄弟を愛することが信者にとって欠かすことのできない車の両輪であることが告げられている。おそらく、その信仰に基づいて神を愛することのみに偏った行動を取ることを是とする者たちがあり、共同体としての基盤が揺らぐ事態が生じていたのだろう。彼らの問題は、信仰を霊的領域に特化したものとし、現実の生活のあり方に注意を払うことを疎かにするところにあった。

福音書日課(マタイ 12 章より)

・日課箇所は、「ベルゼブル論争」と呼ばれる説話箇所、共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝えている。各福音書は、この説話を置く文脈について、それぞれ独自の見方を示している。「マルコ」は、主イエスが悪霊に憑かれていると噂されていることを心配した家族がやってきたという枠を設定して、悪霊ではなく聖霊に依拠している主イエスが構想する新しい「神の家族」概念を提示しようとしている。「ルカ」は、「神の家族」概念の提示をこの説話と切り離し、この説話自体は、悪霊・汚れた霊に対抗する「神の指」としての聖霊の意義を強調するものとしている。「マタイ」は、「マルコ」の示す新しい「神の家族」概念の提示を一部残しながら、悪霊・汚れた霊に対する警戒を強調する意図があるものと考えられる。

・「ベルゼブル」は、「列王記」が伝えるペリシテ人の町「エクロンの神バアル・ゼブブ」(王下 1 章)と同一の異教の神を指すと解される。「バアル・ゼブブ」は「蠅の主人」の意だが、元来は「いと高き主人」を意味する「バアル・ゼブル」であるものを、「列王記」編者がおそらく揶揄する目的で変更した表記。「列王記」では、預言者エリヤが「バアルの預言者」と対決する説話が描かれ(王上 18 章)、エリヤの後継者エリシャによって為された王朝交代に伴って「バアルの祭司」らが肅清されている。日課箇所の説話では、「ベルゼブル」が異教神ではなく「悪霊の頭」とみなされているが、「列王記」の逸話も前提にあったと考えられる。

来週の誕生日 (3 月 16 日~22 日)

。

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-22「深き悩みより」(= I 258 詞)は、M・ルターが宗教改革運動の初期にドイツ人庶民のための詩編歌として作詞した一つで、詩編 130 編に基づいて作詞、1524 年出版の讃美歌集に加えられた。いくつかの曲で歌われてきたが、ダハシュタインの曲を付したもの。同じ詞にルター自身が古い教会旋法に基づいて作曲したものは 160 番に所収。『讃美歌 21』に採用される際に原詞に基づいて改訳されている。
- ・21-289「みどりもふかき」(= I 122)は、19 世紀英国の会衆派牧師で讃美歌作家のユースタス・コンダ

一の作詞の讃美歌で、日本では 1931 年版『讃美歌』からイギリス民謡曲を付して採録されてきた。現代の英語圏讃美歌集では採用されていない。

- ・21-514「美しい天と地の造り主」(= I 449)は、20 世紀カナダで YWCA 活動に従事したメアリー・エドガーがキャンプソングとして作詞した歌詞。曲は、19 世紀英国教会司祭ブリンジャーが趣味で作曲して残した曲の一つ。

21-22「深き悩みより」

Aus Tiefer Not Schrei Ich zu Dir

1. Aus tiefer noth schrei' ich zu dir, / Herr Gott! erhör' mein rufen! / Dein gnädig ohr neig her zu mir, / Und meiner bitt' sie öffne: / Denn so du wilt das sehen an, / Was sünd' und unrecht ist gethan, / Wer kann Herr! für dir bleiben?
2. Bei dir gilt nichts denn gnad' und gunst, / Die sünde zu vergeben; / Es ist doch unser thun umsonst, / Auch in dem besten leben: / Für dir niemand sich rühmen kann, / Deß muß dich fürchten jedermann, / Und deiner gnaden leben.
3. Darum auf Gott will hoffen ich, / Auf mein verdienst nicht bauen; / Auf ihn mein herz soll lassen sich, / Und seiner güte trauen, / Die mir zusagt sein werthes wort, / Das ist mein trost und treuer hort, / Deß will ich all'zeit harren.
4. Und ob es wäht bis in die nacht / Und wieder an den morgen, / Doch soll mein herz an Gottes macht / Verzweifeln nicht noch sorgen. / So thu' Istrael rechter art, / Der aus dem Geist erzeuget ward, / Und seines Gott's erharre.
5. Ob bei uns ist der sünden viel, / Bei Gott ist vielmehr gnaden, / Sein' hand zu helfen hat kein ziele, / Wie groß auch sei der schaden. / Er ist allein der gute hirt, / Der Istrael erlösen wird / Aus seinen sünden allen.

21-22「深き悩みより」

Ye Fair Green Hills of Galilee

- 1 Ye fair green hills of Galilee, / That girdle quiet Nazareth, / What glorious vision did ye see, / When He who conquered sin and death / Your flow'ry slopes and summits trod / And grew in grace with man and God?
- 2 We saw no glory crown His head / As childhood ripened into youth; / No angels on His errands sped, / He wrought no sign. But meekness, truth, / And duty marked each step He trod; / And love to man, and love to God.
- 3 Jesus! my Saviour, Master, King, / Who didst for me the burden bear, / While saints in heaven Thy glory sing, / Let me on earth Thy illness wear: / Mine be the path Thy feet have trod; / Duty and love to man and God.

21-514「美しい天と地の造り主」

God, who touchest earth with beauty

1. God who touchest earth with beauty, / Make my heart anew; / With thy Spirit recreate me / Pure and strong and true.
2. Like thy springs and running waters, / Make me crystal pure; / Like thy rocks of towering grandeur, / Make me strong and sure.
3. Like thy dancing waves in sunlight, / Make me glad and free; / Like the straightness of the pine trees / Let me upright be.
4. Like the arching of the heavens, / Lift my thoughts above; / Turn my dreams to noble action, / Ministries of love.
5. Like the birds that soar while singing, / Give my heart a song; / May the music of thanksgiving / Echo clear and strong.
6. God who touchest earth with beauty, / Make my heart anew; / Keep me ever by thy Spirit / Pure and strong and true.